

九州に於けるヤマメとアマゴの分布

大 島 正 満

昭和 31 年 10 月 18 日受領

緒 言

九州の河川に河川型の鱒類が棲息し、地方名をエノハと呼ばれていることは、古来世に知られている事実であるが、今日までそれはアマゴ *Oncorhynchus rhodurus* Jordan & McGregor であるということになっていて、事実を基礎としてそれを論断した学者はなかつたようである。1925 年に公刊された Jordan 及び McGregor の日本産鮭鱒族に関する報文¹に於ては球磨川産のものを *Oncorhynchus Macrostomus* (Günther) であると報告し、熊本で入手したものを *Oncorhynchus ishikawae* Jordad & McGregor に同定してあるが、この二つの学名はサクラマス即ち *Oncorhynchus masou* (Brevoort) の異名である。即ち前者はこの種の河川型のものであるヤマメ又はヤマメに附与せられたるもの、後者は同種の降海型のものに与えられた称呼である。

然し如上の発表により Jordan 並びに McGregor が、九州にアマゴ以外の河川型の鱒類が存在すること気づいたのは怪我の功名と云うべきであるが、然らば九州に於てエノハと呼ばれている河川型の鱒は何種を指すのであるかは今日まで知る人が無かつたのであつて、本報文はその点を明かにして分布の状態に言及するものである。

1. エノハに 2 種あり

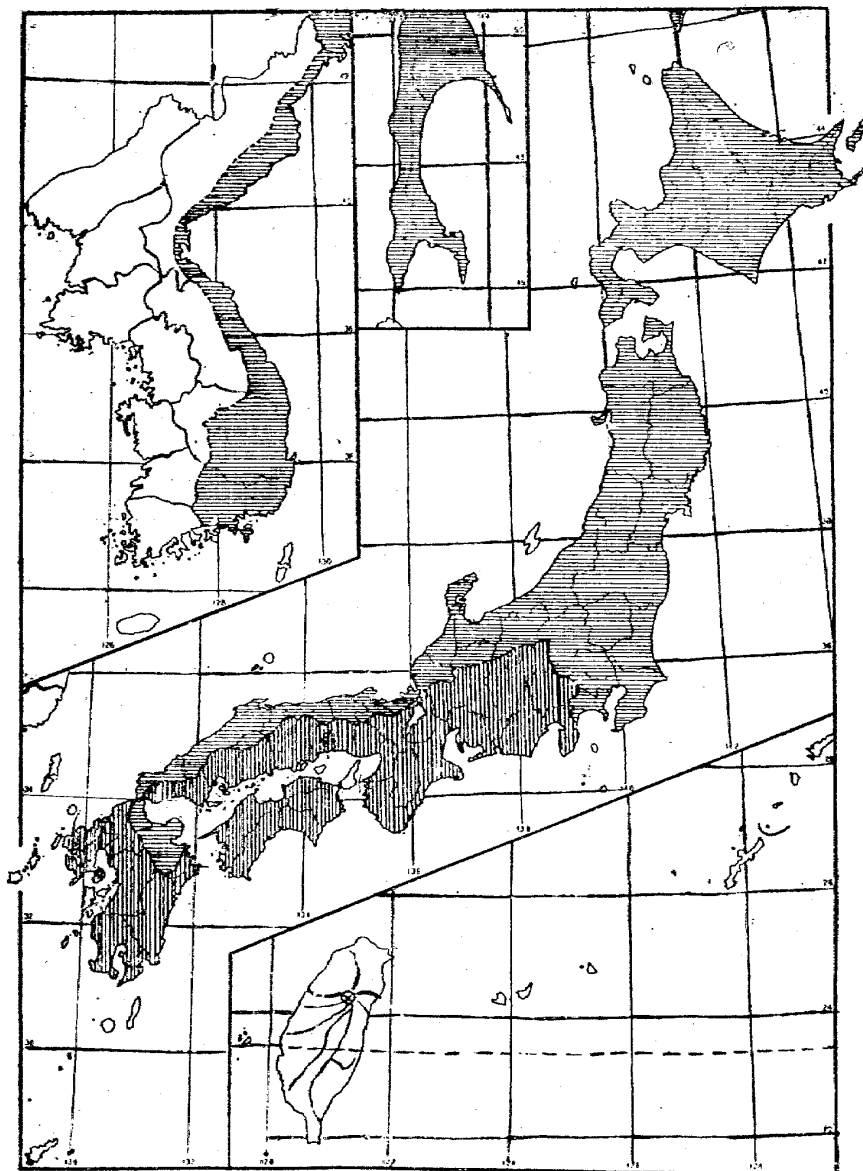
1949 年と 1950 年との夏期、筆者は幸にして熊本並びに鹿児島両県下の内水面を調査する機会を得、特に各河川の冷水域に棲息する魚類を採捕する便宜を得たのみならず、鹿児島大学水産学部²に於ては、溪流魚釣獲の名手である学生木村清朗君が広く九州各地で釣獲した淡水性鱒類の標本多数を今井貞彦助教授の好意によりて自由に検討することができたので、サケ科に属する冷水性魚族の代表的のものである *Oncorhynchus* 属の分布の状態が一挙にして瞭然となつた。

先づ第一に入手し得たのは釣魚に趣味の深い元陸軍中將古閑健氏が阿蘇の西側に源を発し、筑後川に合流する枝立川の最上流満願寺川で釣獲されたパール・マークの鮮なエノハの一年魚 2 尾であつたが、これは紛れもないヤマメ即ち *Oncorhynchus masou* (Brevoort) であつたが、土地ではこれをエノハと呼んでいた。続いて人吉市の名高い漁人吉村一氏が球磨川の冷水域で採捕したエノハの 2 年魚数尾を分与されたが、これも亦間違のないヤマメで、嘗つて Jordan 及び McGregor が同じ水域にヤマメの存在を報告したことは誤断で無かつたことが立証された。

鹿児島大学水産学部所蔵の標本中にはヤマメとアマゴ（中国方面ではヒラベ又はヒラメと呼ぶ）即ち河川型ビワマスである *Oncorhynchus rhodurus* Jordan & McGregor とが混在していることを確認した、九州各地ではヤマメとアマゴとを類別せずに一様にエノハと呼んでいることを知ることができたが、長崎大学水産学部の岡田喜一教授の言によると、大分方面の山地の住民の間にはヤマメをギンエノハ、アマゴを金エノハと称して区別している処もあるという話である。伝聞するところによるとその昔弘法大師が大分方面の山地に巡錫した際、里人が供御にする珍味が何もないことを訴えたところが、よしよしとうなづいた大師が川のほとりに生育していた覆の葉をちぎつて流れに浮べたところがそれが忽ち化して魚になつた。依つてこれをエノハと呼ぶとのことであるがその真偽は明かでない。又金銀の別はヤマメは全身銀色で体側に黒斑と黒点とがあり、アマゴは稍金色を帯びて体側に黒斑と鮮麗な朱点が散在するのに帰因しているのであるという。

1. Mem. Carneg. Mus., X, 1925, pt. 2.

如上の資料を調査綜合して見た結果九州のエノハはヤマメとアマゴとの総称であり、下記の如く太平洋に注ぐ諸河川の冷水域にはヤマメが棲息し、瀬戸内海に注ぐ諸川の冷水域にはアマゴが棲息し、両者の棲息地域は截然たる境界線によりて界されていることが明かになった。



ヤマメ及びアマゴの分布図

横線地区：—ヤマメ 縦線地区：—アマゴ ⊗：—台湾産地

太、北海道並びに東北地方一帯が北海道でヤマメ、内地でヤマメと呼ばれる河川型桜鱒の棲息する地域であるが、漸次南に進んで関東方面に達すると、箱根足柄以東の河川即ち酒匂川、早川等はヤマメが棲息する水域であるのに、函嶺を越えて静岡県内に入ると、狩野川の本支流ともヤマメの姿は消えてアマゴが入れ代る。この関係は相模川、多摩川に関しても同様で、両者共に本支流共にヤマメが棲息するのに関東山脈を越えて甲府盆地に入ると、富士川の本支流凡てがアマゴの領域となる。甲武信岳、八ヶ岳、乗鞍岳を連ねる分水嶺の北を日本海に向つて流下する信濃川の本支流はヤマメの水域で、その南面に発して太平洋に注ぐ富士川、大井川、天竜川等はアマゴの水域である。飛騨高山盆地に入れば、両者の境界線は高山の南部を西に走つて福井県の大日岳方面に伸び、神通川上流の宮川、射水川上流の庄川等のヤマメの棲息水域と木曾川の支流で

I. 九州に於て桜鱒系ヤマメの棲息する水域

1. 福岡県筑上郡岩谷
2. 福岡県遠賀川
3. 長崎県南高来郡湯江（境川）
4. 熊本県阿蘇郡枝立川
5. 熊本県球磨郡球磨川
6. 鹿児島県米の津川支流鍋野川
7. 宮崎県大淀川上流
8. 宮崎県耳川（椎葉ダム附近）
9. 宮崎県米良川支流

II. 九州に於ける琵琶鱒系アマゴの棲息する水域

1. 大分県山国川
2. 大分県阿蘇野川
3. 大分県大分川支流
4. 大分県大野川上流
5. 大分県佐井川

2. ヤマメ及びアマゴの分布の境界線

上に述べたような資料を基礎として九州に於けるヤマメとアマゴとの分布の境界線を云為するためには、先づ以て日本本土の情勢を略説して置かねばならぬ。人も知るが如く朝鮮の東北部沿岸地帯、樺

ある飛騨川、益田川、長良川等アマゴの水域とを劃然と分つ。それより以西は略福井岐阜両県の県界に沿うて若狭近江の境界を過ぎ、丹波に入りて由良川と保津川との水を分ち、その後は山陰山陽の脊梁山脈に沿うて、西の方関門海峡に達する。

このように本州の脊梁を西に走つて来た分布の境界線が、山口県を二つの地域に分ち、その余勢をかつて関門海峡を渡り、九州に於ては筑豊山塊の遠賀川、釣川等の地溝によつて断ち切られた部分に露頭を現わすものと見ればよい。この線は東南に伸びて英彦山の西麓をめぐり、日田盆地の東方で筑後川と大分川との水を分つ分水嶺を過ぎ、久住山の西麓地帯を熊本大分の県界に沿うて阿蘇山塊の東斜面を東に走つて祖母山に達し、宮崎県の北部に於て太平洋に注ぐ五ヶ瀬川と大分県下門に於て別府湾に注ぐ大野川との流域を分ちつつ豊後水道の関門である地蔵ヶ鼻に終る。

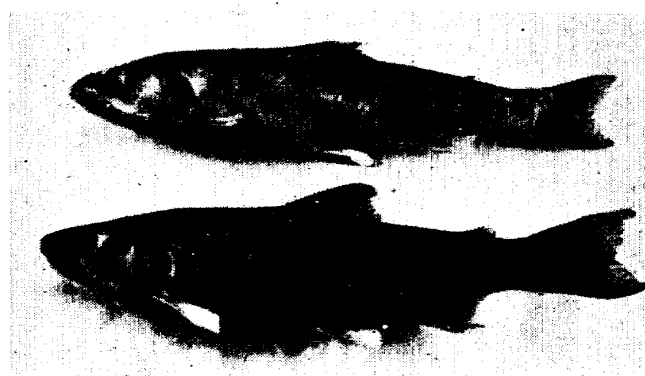
これを約言すれば阿蘇山塊を中心として太平洋に注ぐ冷水域を有する長流には凡てヤマメを宿し、瀬戸内海に注ぐ同様の河川にはアマゴが棲息しているのであつて九州全土は劃然たる二つの分位域に分たれる。

四国の代表的河川である吉野川、仁淀川、四万十川等は、その上流冷水域にアマゴを保有する。而して瀬戸内海に面する地域には目ぼしき河流が無くアマゴの存在を耳にしないが、東に相對する紀伊半島同様四国全土がアマゴの棲息地域と見るのが至当であらう。

熊本県下には氷河時代の遺物と見らるる寒帯性の褐藻カワノリ *Parasiola japonica* Yatabe の如き藻類の現存するあり、又天草灘よりはステゴドンの化石せる臼齒などの発見せらるるあり、氷河時代には現時の太平洋沿岸は寒流に洗われていた記跡歴然たるものがある。桜鱒系のヤマメが現時日本沿岸に注ぐ河川の上流に一般的な棲息するの

みならず、遠く台湾大甲溪にまで不連続的な分布している点から推測すると、往時日本海を西に流れていた寒流の勢は今日よりよほど強烈で、その一部は九州の太平洋岸に沿うて本州南岸に向つて逆流し、鮭鱒の親魚を日本海方面から拉し来つてそれ等が河川に溯上する機会を与えていたものに相違ない。現に松原喜代松博士は有明海方面で漁獲された桜鱒の親魚を目撃したことがあるといわれる。最近佐賀県唐津湾に注ぐ玉島川（東松浦郡岳崎町七山村地先）や福岡県糸島郡加布黒湾に注ぐ泉川に毎年晩秋の頃少数ではあるが鮭溯上する事実今井貞彦氏によつて確認されているし、山口県下の阿武川にも毎年鮭が溯上する事実も報告されている。即ち鮭の分布の南限が多くの水産関係者が認めているより遙に西南方に存することが明になっている点から考えると、桜鱒の親魚も小数ながら九州近海に到達しているのではないかと考えられし、今後尚精査せば九州の河川に棲息するヤマメの中には降海型のものも発見されるのではないかと思われる。

孰れにしても九州にヤマメが棲息することが確認せられたのみならず、ヤマメとアマゴとの分布状態が明かになつたのは、動物地理学上頗る興味深い事柄であるといわねばならぬ。



上 鹿児島県米の津川支流鍋野川にて採捕せるヤマメ

下 大分県大分川にて採捕せるアマゴ 白点は朱点の褪色せるもの

Résumé

Studies on the Distribution of Freshwater Salmons, *Oncorhynchus masou* (Brevoort) and *Oncorhynchus rhodurus* Jordan & McGregor, found in the Streams of Kiushiu

Masamitsu OSHIMA

As the results of the extensive collections made by the writer in the year 1949 and 1950, assisted by his student Mr. Sadahiko Imai, assistant professor of the Faculty of Fisheries of Kagoshima University, in order to compile complete list of freshwater fishes inhabit in the streams of south western part of Kiushiu, it was affirmed that there exist two species of freshwater salmons in the head waters of main streams, treated under the same vernacular name 'Enoha'.

One of which is evidently the river form of *Oncorhynchus masou* (Brevoort), while the other is the same of *Oncorhynchus rhodurus* Jordan & McGregor. Distributional area of the two is quite distinct, the former inhabiting in the headwaters of main rivers which flow down to Pacific while the latter's habitats are limited to the upper streams of long rivers which enter into the Inland Sea.

Oncorhynchus masou is the salmon of northern element, its distributional center being Hokkaido, instead of *Oncorhynchus rodurus* which is the form originated in Lake Biwa in the remote past. This facts show that the Pacific coasts of Kiushiu had been washed by the cold current coming down from Japan Sea in the prehistoric time, enabling southward migration of anadromous Salmonoid fishes like *Oncorhynchus masou* and *Oncorhynchus keta* as well. Occasional occurrence of the former at the off-shore of Kumamoto district and usual autumn run of the latter into several rivers in northern Kiushiu supports this supposition very strongly.

会 記 III

中国四国支部広島例会。昭和 31 年 6 月 9 日広島女子短大にて行われた。

講 演

1. 原虫テトラヒメナ属纖毛虫の培養と形態について 洲 浜 幹 雄 (廣大・理・動)
2. カキの纖毛運動に関する諸問題 新 川 英 明 (広島女子短大)
3. 模隔膜の発生——形態発生及び組織発生上の 2・3 の点に就いて 沢 野 十 蔵 (廣大・医・解)
4. 脊椎動物の排卵 灘 光 普 作 (廣大・理・動)
5. 野 鳥 の 研 究 晴 山 省 吾 (廣大・皆実分校)